

市内には江戸時代から主要な道路として利用され、今なお当時の名残が感じられるものがいくつかあります。

小高(飯高地地区)集落の中央を通過して、坂(現在の多古町坂)への道路も古道の雰囲気伝えるものといえるでしょう。4月号で紹介した「黄門桜」近くから小高集落への入り口付近と、八坂神社裏の道の大樹の下にも道祖神がまつられその名

残をとどめています。

集落に入り、裸参りが行われる集落中央を通り、諏訪神社を過ぎ林の中を坂方面に進むと、右側に林と畑の境に木々に囲まれた塚が目にとまります。これを「開山塚」と呼びます。開山とは、寺院を開いた僧をいう言葉で、塚の上に石塔がまつられていることでそう呼ばれるようになったのでしよう。

石塔は高さ約90センチ、正面に「当山(妙長寺)開基 本妙院日善聖人」と刻まれ、集落中央にある妙長寺を天正3(1578)年8月に開き、同6年に亡くなった日善の供養塔です。

小高にある開山塚

が建てました。なぜ妙長寺から離れた村境に石塔をまつたのか分かりませんが、日了の考えが反映したためか、と想像が膨らみます。

妙長寺では1800年代には寺子屋が開かれていて、周辺村から通う筆子もいたことでしょう。その通い道の側に塚はあります。日了も師匠となり亡くなると、小高村や周辺の坂村、方田村(現在の多古町方田)など7カ村、世話人を含め50人ほどの人たちが(筆子中)が墓を建てました。坂村、方田村からは約30人が墓石に名を連ねています。

この道には明治元(1868)年10月、水戸藩最後の抗争「八日市場・中台の戦い」での戦死者を塩漬けにしてたるに納めた遺体を村継ぎで運んだとの話が伝わっています。

開山塚はきれいに夏草が刈られていました。

(市文化財審議会委員・

依知川雅一)

関秘書課広報広聴班

☎73・0080

